第81回日本公衆衛生学会総会に参加して

山梨県感染症対策センター
感染症対策企画監　植村 武彦

甲府盆地を囲む山々が秋の化粧を始めた10月7日から9日までの3日間，第81回日本公衆衛生学会総会が，初めて山梨県で開催されました。

学会長は，山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座教授であり，同大学院総合研究部附属出生コホート研究センター長でもある山縣然太朗教授です。筆者が高齢者福祉・介護の担当であった約20年前に山縣教授の研究結果に基づき，「山梨県が健康長寿である秘訣は，『無尽』と『ほうとう』にある」といった報道が盛んになされました。その結果，「山梨県の高齢者は元気」とのイメージが県内外に定着したという意味で本県にとって恩人のような方であり，当時，大学の研究室へ頻繁に足を運んで御指導いただいたこともあって，山縣教授がプロデュースされる学会総会を非常に楽しみにしておりました。

「公衆衛生イノベーション －原点確認、変革推進－」をメインテーマとした今回の学会総会は，現地での参加，LIVE配信・オンデマンド視聴のハイブリット方式となりましたが，コロナ禍で3回目となる今回は，登録数が1,280人と前回から300人増となり，ほぼすべての講演・講義をオンデマンドで視聴可能にするなど，正にウィズ・コロナの見本となるような開催となりました。

地元山梨県の長崎知事による特別講演「新型コロナウイルスとのたたかい」，中央葡萄酒株式会社の三澤社長による特別講演「欧州で鍛えられる白ワイン・甲州」に引き続き，山縣教授による学会長講演「研究は住民にはじまり，住民におわる」では，自治体との協同による地域保健活動の実践例として「甲州プロジェクト（甲州市母子縦断調査）」「山梨県健康寿命研究（YHALE）」，国の健康施策への関与例として「健やか親子21，健康日本21」「母子保健情報の利活用」「身寄りのない人の医療」などを紹介した上で，「医学・公衆衛生学は実学」「何のための，誰のための研究なのか」「研究成果の先に何があるのか」との問題提起を通して，講演テーマである「研究は住民にはじまり，住民におわる」の意味を各自に考えさせる非常に示唆に富んだ講演内容でした。

1日目午後，（公財）結核予防会の尾身理事長による特別講演「新型コロナ これまでとこれから」では，コロナ禍初期から現在に至るまでの対策の評価と課題などについて，丁寧に分かりやすく解説していただきました。「電車がなくなる」との随行の指摘も無視して時間ギリギリまで聴衆に正確な情報を伝えようとする尾身理事長の姿は感動的であり，その思いを無駄にしてはならないとの決意を新たにしたところです。

1日目夜の自由集会，筆者が参加した「結核集団発生の対策に関する自由集会」では，東京都西多摩保健所及び板橋区保健所による結核集団感染事例への対応を取り上げ，発生状況や対策の進め方などを振り返ることで，今後の対策のあり方を参加者が共有できる貴重な機会となりました。

また，2日目と3日目にも，市民参加型交流プログラム「語り継ぐ，山梨県の地方病（日本住血吸虫症）制圧の歴史」として，本県における地方病との闘いについて，当時の行政担当，記録を残す博物館関係者，学校教育で語り継いだ教員，この歴史を絵本にした若い世代などが様々な方々と共に語り合うなど，多様なプログラムが実施されました。

最後に，今回の学会総会の準備から当日の運営，事後の整理まで御尽力いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。